

エミール・ラスクの『判断論』と西田幾多郎 V

大熊 治生

倉敷芸術科学大学芸術学部

(2002年9月30日 受理)

承 前

このような前提のもとでは、判断決定の客体、すなわち陳述の組織が主語と述語から成立するという理論はひとつの全く別の重要性を含んでいる。この理論はその時には、陳述の組織構造の本質のなかにあるのだが、この理論が要求するのは、例えばその（陳述の）なかに於いては、何かある連繋されるべき諸要素という二通りのものが現われてくる、ということだけではない。それはまさに内容と種類に従って分かれたその二つの構成要素がその（陳述の）なかで代理され（主張され）ねばならないということを要求するし、またさらに、それら構成要素の間で共属、非共属が起こってくるということをも必要とするのである。

しかし、もしこのように陳述の組織構造の心理学的文法的な二分肢性と事象的なそれ（二分肢性）とが、完全に崩壊するとすれば、その時にはそれら二つを主語－述語－関係という名で表すことが正当かどうかは、疑わしいことと思われるであろう。しかし論理的理論に於いては、常に主語の位置と述語の位置の二つの異なった意義が互いに入り乱れていた。それどころか文法的に定位付けられた分節化の試みも、同時にメタ文法的な事態を表現せよ、という要求をしてきた。

しかし、心理学的一文法的なものから自らを解放しつつある主語－述語理論にとっては、(S.49) それ以上の、しかも根本的な先決問題が存在する。陳述組織構造の諸要素は単純な構成要素ではなくて、むしろそれ自体すでに合成された構成要素である。従って「概念」は「徴表の複合」である。ここで研究は再び二つの可能性の前に立つことになる。その一つは、概念の複合性が *toto genere*（種族全体から）として、陳述全体の被連結性から区別されているように見える場合である。その場合には、概念の複合性の理論は、完全に判断理論の領域から脱落しており、概念的な陳述の構成要素は、判断理論の内部では解きたいものとして、相対的諸要素としてみなされるべきなのである。陳述の要素は *συμπλοκή*（結合）によって、陳述の接合という、完全に特殊な、しかも概念の構成から区別された *συμπλοκή* が理解される限りは、*κατά μηδεμίαν συμπλοκήν λεγόμενα*（どんな結合にもよらないと言われるものども）である。それがアリストテレスの立場であり、それに従えば、判断的総合のなかで、堅固な概念体系の分節肢と共に仕事がなされるのである。しかしもう一つの可能性は次のような見解が、——すなわち、概念の複合のなかに於いては、陳述的接合以外のものは置かれていない、という見解、そして概念は堅固に陳述を行なうこと、とか判断を下すことより以外のこ

とを表さない、等という見解が支配的になることである。そのときには概念と判断との間の境界線は取り払われ、両者の相違はついには、まさに主語と述語とを文法的に分離するのと全く同様に、心理学的一文法的な連続の問題であることが洞察されるのである。つまりその連続とは、ある時はこの、ある時はあのという、把握する認識過程であり、またそれに対応して、ある時はこの、ある時はあの、というすでに「把握されたもの」として前提する認識過程の連続の問題なのである（註1）。

註1 これに加えて、シュライエルマッハー：『弁証法』§ 144ff.247,304

トレンデレンブルク：『論理学研究』II-3,1870.231ff

シュッペ：『認識理論的論理学』1878年 6f,104f,117ff.

ベルクマン：21f,39.

ヴィンデルバント：否定的判断の理論への機構（ツェラー記念論文集）1884.180f.カテゴリーの体系について（ジークヴァルト記念論文集）1900.45f.

リッケルト：『定義理論について』1888.44ff.

マイノング：『仮定について』57f.

J. コーン：『認識の前提と目的』81f

ナトルプ：『精密な学の論理的基礎』1910年 39ff.特に42.『哲学』1911.50f

(s.50) 概念と判断とのこのような平均化作用と共に与えられるのは根底的な解明の、すなわち単純な要素に迄押し進んでくる解明の意図に対する予定的条件である。各々の複合の背後に例外なく存在するのが、陳述－接合なのであるから、真の陳述要素として見做され得るのは大体に於いて、原構成要素のみであろう。さらに詳しく問われねばならないことはまさに論理の意味における $\sigma\tau\omicron\iota\chi\epsilon\iota\alpha$ (要素) とは何であるかということ、即ちどんな種類の被結合性も自らの内に含んでいない要素が、自らの最後の論理的に重大な矛盾に従って、そしてまた真に論理的な主語－述語理論の意味で、互いに対立して限界付けられ得るというのはどんな仕方なのか、ということ、これである。

しかし最終的要素へと分解することができるという問題は、あらかじめ除外しておいて、まず第一に眼に入れておかなければならないのは主語－述語理論のメタ文法的性格だけである。この性格は、判断組織の構造を、判断の彼岸にある存在の分節から、即ち諸対象自体から取り除こうとする試みのなかで明示されねばならない。

アリストテレスは後世全体にとっての標準として、理論的構造理論のなかでこの事象的な背景を際立たせようとした。彼は本来的、形而上学的意味における存在の根本的分割を「陳述の類」のカテゴリーに従って行なった。そして、それによって確かに最高の事象的分節を、陳述の現状の分節へと述語的に関連付けたのである。彼はカテゴリー的规定を陳述の要素として、 $\kappa\alpha\tau\grave{\alpha}\ \mu\eta\theta\epsilon\mu\acute{\iota}\alpha\nu\ \sigma\upsilon\mu\pi\lambda\omicron\kappa\acute{\eta}\nu\ \lambda\epsilon\gamma\acute{o}\mu\epsilon\nu\alpha$ (どんな結合にもよらないで言われるものども) として特徴付けた（註1）。(s.51) 従っておそらくは、陳述の現状から出立しつつ、そのなかに「カテゴリーの発見に対する導きの糸」を見いだすことができると考えたのである（註2）。彼はさらに、本来的、根源的陳述の真の主語に対しては彼の形而上学的實在に従って、

根底にあるもの、即ち実体を、真の述語に対しては事象に従って、実体に依存しているものを説明することによって、主語と述語による分解を、対象的－カテゴリーの序列に従属させたのである（註3）。アリストテレスはそれによって、後のあらゆるメタ文法的な主語－述語理論の模範となったのである。但、我々が今主張しなければならないのは次のことである。即ち、主語が最後には「物」を、述語のほうは「属性」と「働き」をそれに従って引き合いにだすところの、普通の公式が、単にアリストテレスの解釈の弱々しい余韻を与えるにすぎない、ということ、しかもそれは普通の公式によれば、範疇の秩序の狭い固定化が、感覚的－直観的な、空間的－時間的な現実性に、即ちアリストテレスとは全く縁のない現実性に結び付けられるのが常である、という理由による、ということ、これらのことである（註4）。そうでなければ彼の实体－偶有性－理論は、確かにまた全く途方に暮れて、やはり同様に主語と述語から成り立っている判断の前に立たなければならないであろう。というのも、それらの判断は、哲学的－形而上学的認識が下さねばならないものだからである。主語－述語関係を、事象それ自体の分節化へと還元するすべての理論にとって、今や次のような必要が存在することになる。

註1 特に『カテゴリー論』4.1b.参照。

註2 トレンデレンブルク：『カテゴリー理論の歴史』6ff.,11,33,
シュッペ：『アリストテレスの範疇』1871.9ff.
マイアー：II.b.特に291ff.318ff.
アベルト：『ギリシャ哲学史への寄稿』1891,124ff.,132.,138ff.

註3 とりわけ後記：I,22. トレンデレンブルク：14ff.,19,21,34,53f.参照。

註4 『哲学の論理』227ff.参照。

(s.52) それは文法的な主語－述語概念と、メタ文法的なそれとを区別し、すでにアリストテレスに於いて模範的に行なわれたように、あらゆる所で事象的な主語と述語とを、言語的表現の変形を通して、現前するものとして証明する、ということである（註1）。

註1 後記I.22

しかしこのような企ては、理論的意味構造を諸対象の構造へと還元するものであるから、論理学における前カント的的定位とカントのそれとの間の深淵がすべて目につくようにされねばならない。論理学の前カント主義にとっては対象構造は、もしそれが全く論理学の問題ではなく、むしろ唯、形而上学、即ちメタ（超）論理学の問題であり得るならば、メタ論理的なものへと入っていかねばならない。陳述構造と判断構造を対象構造に結びつけること、それは論理学のカント以前の時代では、メタ論理的なものを論理的なものなかと突き出させることと同様のことを意味している。というのはそこでは判断の彼岸の対象的なもの、判断的・理論的なものを超えて存在するものが、直ちにメタ理論的なもの一般へと陥るのである。それ故このアリストテレスのメタ文法的な主語－述語理論は、メタ論理性の弊害に悩んでいるのだ。その理論に於いては、一般に論理学を関与させる問題が、何故話題になるのかは全く洞察され得ない。

実体と偶有とへ分離することによって、あらゆる対象性の原的分節化が露わになるということ、そして同様に諸対象と一致することが認識と理論的意味組織の使命であるということ、これらのことが一旦認められれば、最高の対象的分節化は、たしかに認識と理論的陳述組織において、再び見出されねばならない。しかしそれも各々の諸対象の多様性が任意に、認識において個々のものの中へと反映されるということ以外の意味ではない。(s.53)というのは、この最高の対象的分節化に対しては、諸対象の各々の任意の内容に対してと、まさに同様のメタ論理的事情があるからである。それ故、それが唯不正に起こるのは、それにも関わらずその理論が企てるように、このメタ理論的な対象の区別から、一つの特別な、内的理論的問題が、即ち意味構造の分節化が読み取られる時なのである。

それにたいして、実際ここで示されるのは理論的意味組織の分節化についての理論全体に対するカントのコペルニクス的な偉業の革命的意義である。カントが諸対象自体を論理的なもの、理論的なもの、認識的なものによって貫徹されるようにすることによって、彼は、諸対象の分節化を、やはり同時に論理的なものの全く固有の本質的特性として把握する可能性を創るのである。今や判断領域の意味構造を判断の彼岸にある対象構造に結びつけることに対する権利は、初めて、論理的なものの支配領域を見捨てることなしに獲得されるのである。判断の彼岸にある諸対象に対して定位付けられた、メタ文法的な、そしてそれにも関わらず、論理内にとどまっている理論に対する予定条件がようやく与えられたのである。

従って論理的なものの一般の特性から、主語と述語への分離が理解されねばならないのである。そしてもし、やはりその場合に、対立的契機を差し引いた後に残っているところの、陳述の現状の本来的要素を根本的に分離することと、そして理論的組織の構造における、決定的切開とが問題になるのであれば、これと共に心理学的一文法方向から独立な、理論的領域の最終的意味が規定されねばならない。主語と述語に従っての分割は真の論理的有意性に対する要求を失うか、あるいはやはり (s.54) 認識が次のように解釈されるのでなければならない。その解釈とは、認識が自らの論理的意味に従えば、主語に述語の規定を賦与するという結果になり、主語―述語の方向の一意性は、理論的なものの意味を通して規定された分枝の地位へ還元される、ということなのである。

しかし、理論的領域を支配している原的分節化はどこに存立するのか？

とにかくそれに関して、より基本的な決定などは何もないのであって、それはあたかも、論理的なもの、理論的なものが、一般に、そしてこのようなものとして、少なくとも本来の形をした理論的なものが——そしてこのようなものとして、それは序文のことばによれば対象領域を支配するのであろうが——あるいは思惟可能なものの全てにおける論理的な、純粋な内容が特別な現象にまで凝縮され、そしてその時にその内容の、いわば機能的な本質に従って、一つの完全に規定された特徴的情況の中で、あらゆる思惟可能なものに対立しているが如きものである。そしてそれ故反対にあらゆる思惟可能なものが完全に規定された立場で、論理的なものに対立している、というようなものである。この理論的な根本的現象の出現に対してはその時、

あらゆる認識の本質が結びついている。そしてあらゆる思惟可能なものの、それ（現象）に対する関係に基づいているのが理論的領域における最後の分節化である。

論理的問題を体系的に取り扱おうとする企てが根本的な部分で、対象自体の中にある論理的原現象を我がものとしなければならないであろうということ、このことはより包括的な証明の表現のために残されていなければならない（註1）。そこではあらゆる可能な論駁に対して、理論的哲学全体の先端に立たねばならないような命題が確保されるべきであろう。

註1 その代わりに、ここでは次のことに対して暫定的な論述である『哲学の論理』（Log.d.Philos.31ff.）が指示され得る。

(s.55) その命題とは論理的内容の形式特性についての命題である。指示特性において、補足と充実の必要において、要するに形式的性格において、論理的なものの機能的特性は明らかにされる。それに従って規定されるのが、理論的物象性の王国に於いて、全てを支配する分節である。即ち、形式と内容へと分割されてあることである。形式は素材に対しては指示的であり素材は形式の中にあるのである。形式－素材－の二重性の中に、そしてまた形式によって、素材が取り巻かれ、捕らえられていることの内に、理論的構造全体の原的分節化が、即ちコペルニクスの前提によれば、対象的構造と一致する分節化が存するのであり、またそれと共に、論理的なものの一般と、思惟可能なもの全てとの間に起こる、あの最終的情況規定性が存するのである。思惟可能なものの現状総体に於いて、本来的、論理的内容がそこから受け取るもの、あるいは理論的領域に対して刻印を与えるところの、そしてそれがなければ唯、論理的に非定形の要因が受け取るものは、それ自体は空虚な形式という立場である。そしてそれに対立しているのは素材の状況の中にある各々の何かあるものである。しかし論理的な個別形式はカテゴリーとして示されるべきである。

しかし以前に判断の客体組織構造の「形式」について、その「素材」に対立させて論じられた（上記s.38）し、また「形式」の概念によって、すでに別の使用がなされたのであるから、カテゴリー形式を、カントの概念が内部に入れて以来、論理学における、完全に異なった形式概念が入り乱れてしまった、ということが明確に示されるべきである。「形式」は例えば、判断の、概念の、推理の、等々の「形式」はカテゴリーという意味での形式とは何か完全に異なったものである。我々は両者の形式の種類を、構造形式と内容形式として、もっともよく区別する。というのはカテゴリーということによって問題になるのは（s.56）組織の構造を形成している要素の被関連性と被接合性ではなくて、むしろその要素自体である。即ち自らの規定された状況の中でのみ、他の要素に対立するところの、つまり、その完全に本来的な被指示性と、補足の必要性とのために「形式」と呼ばれるところの論理的要素が問題となるのである。従って同一性とか、因果性とかいう一定のカテゴリーの個別的形式が意味するのは、形式状況の中にある一定の論理的内容である。その形式的特性は、たしかに諸要素間の固有の関連性を表現するが、その点では本来的構造、あるいは構造形式を、即ち対象領域に属している論理的原現

象に対して、特徴的な構造形式、従って論理的原構造を表現する。しかもそれは非対象的第二次的論理的現象の領域の中で支配的であるところの、より複雑化した構造形式に対する区別の中で起こることなのだ。それ故カテゴリーの形式特性は、特別な構造形式を指示する。しかし、もし我々がカテゴリーか、或いはカテゴリー的形式について語るとすれば、形式的情況の中に、即ちこの固有の対象－論理的構造形式の中にある、一定の論理的内容を考えるのであり、それ故単なる構造形式より以上のことを考えるのである。つまり、この形式をその論理的「素材」と共に、即ちこの形式の中にある、一定の意義内容の、例えば同一性とか、因果性の中に潜んでいる論理的意義内容の「素材」と共に考えるのである。この根拠から、カテゴリーは内容的形式として際立たせられるべきである。

それと共にカテゴリー的形式の概念は論理学全体の根本問題となるのである。ところで、判断構造の研究が、理論的原分節化へと導いたのであるから、そこに於いては序論でのべられた試み一つつまり、理論の意味構造を理論的構造の原現象へと統一的に定位させる試み－が認められるべきである。(s.57) 理論的哲学に於いて基本的なものとして認識された形式－素材－の二重性が、一旦その孤立から自由にされるや否や、実際絶対的に統一的論理学の構想が念頭に浮かばねばならない。そのような論理学に於いては、唯一つの理論的現象が、根源的と認められるのみであり、それに対してその他の全ての論理的現象は、それ故判断的構造もまた何らかの仕方で根源的現象の派生語として、また錯雑化として把握されるべきだからである。

それ故もしもカテゴリーとカテゴリー素材への分岐が、理論的領域にとって最高に規定的なものとなるとすれば、そこからまた、一義的に明らかになるのは、本来的、先験的論理的な、判断の彼岸にある認識の原概念であり、そしてその概念からは、今や主語－述語関係が取り除かれねばならないのである。認識が特別に理論的な主観活動であるならば、認識の課題は各々の何かあるものを、カテゴリー的素材として、即ち関係性の中で、論理的或いはカテゴリー的形式を通して搜し出すことの内に含まれている。たしかに認識素材を自由に使いこなすという認識の特色を、カテゴリー的認識形式を通して認めようとする、多様な傾向が存在する。認識は事実、素材を論理的なものの支配に任せることになるし、理論的客體性を奪われたものを理論的に客観化することになる。さて形式特性が、一度理論的なものそれ自体と、分かちがたく結び付けられるとすれば、特殊－理論的な態度と結び付けられねばならないし、それ故非常に粗略な、また非常に素朴な認識と結びつかねばならないのと同様、各々の認識、体系的に最も完成した認識と結びつかねばならない。そして我々はそれを探求、研究、理解、解明、反省、考察、熟考、究明、穿鑿、自省、経験的或いは哲学的知、と呼ぶことができる。カテゴリー的形式を通して素材を把握することが、例えまだ非常に概括的であっても、それは意味に従えば、連帶的なものであろうし、次にこの事態が、言葉で自らの充分な表現を見出すかどうかは、全くどうでもよいことである。(註1) (s.58) 認識を通して、論理的「素材」や、論理的関係における「混沌」は形式の刻印を押された全体へと変形され、論理的暗黒は理性的透明さの中へと置き入れられるのである。カントが感覚的、直観的領域に対して示したのは、そこでは感覚の

「混乱」が、ものと出来事のカテゴリー的に訓練された世界へと高められる、ということであり、それは理論的には関わりのない内容へと、特に哲学的な認識素材へと広げられることができる。それによって初めて、カントの先験的論理学的形式概念によって規定された認識の原概念は、その真の統一性と深さに於いて承認されることになる（註2）。

ところで、カテゴリー的形式の中にある素材が、この認識概念によって受け入れるのは、カテゴリー的な包括からは独立に、カテゴリー的には関わりなく現われることができ、しかもそれ故に、理論的には関係のない「直接的な体験」に対して、近付き易いものであり得る、何かあるものの地位である。認識と結びついているのは、ひとえに論理的形式が、論理的に非定形な素材の塊へと近づくことである。それ故素材は、認識に対しては基礎となっているものであり、認識に「与えられたもの」であり、そこに於いて認識が自らの作業を行なうところの土台である。カテゴリーはそれに対して、単なる論理的付加物、或いは物質的基体に対して歩み寄るものである。真の「主語」は、従って、素材であり、真の「述語」は即ち「範疇」である！認識は論理的規定作用であり、論理的記録、特徴づけであり、そしてまた論理的に裸のものにカテゴリー的述語を与えることである。

註1 『哲学の論理学』 80ff.88f.,182. 参照。

註2 それを示すことが哲学の論理学というわたしの著書の基本的動機である。

認識は（s.59）素材を範疇的規定の中へ置き入れるのであるが、その規定の中ではそれ（素材）がそれ自体で存在し、それ（素材）に帰属する理論的霊力が、それに割り当てられるのであり、それに帰属するカテゴリー的形容詞と共に承認されるのである。そして認識はこのような作用によって、主語に対して、それに「ふさわしい」述語を添えるのである。判断の組織構造の中で、互いに「ふさわしい」か、ふさわしくない要素は、最終的にはカテゴリーとカテゴリー的素材であって、それ以外のものではない。素材というのは、それをめぐって、或いはそれについて知られるところのものであり、カテゴリーというのは認識がそれについて知っていて「陳述」しなければならないところのものである。手を付けられるべき素材は論じられるべき「質料」を形づくっているし、また認識の課題がそこに於いて確証されるべき「題材」を形づくるのであり、「主題」を与えるのである。つまり、それに対して適用されたカテゴリー的装置がこの課題の本来的遂行と成就とを包んでいるということなのだ（註1）。

註1 それに基づくべき述語理論に関しては、形式－素材－の二重性が既に『哲学の論理学』の中で述べられている。特に、69ff 参照。

それと共に、以前に要求された条件は実現されている。認識は、自らの本質と事柄に従って、賓述として、即ち素材の主語についてのカテゴリー的述語の賓述として把握される。ここでは理論的な構造の現状の、現実演繹可能な、理論的な根本的現象から導来し得る二分節性が証明され、そしてそこからまた、主語－述語関係の一意性への理解も、二つの分節の交換不可能

性への理解も得られるのである。しかしまた、陳述の個々の場合に於いても二つの構造の現状は、認識一般の本質から結果として生じたのであるから、疑いなく見出されねばならない、ということ、このことについては同様に解決が与えられている。(s.60) 個々の「陳述」や或いは「判断」の何かある一つの場合に於いて、正当にも「認識」が、従って理論的態度が話題になるのであれば、ここでは以前にのべられた論証が力を得てくる。その論証とは、その時には、言語的表現の問題からは完全に独立に、「意味」と事象に基づいて、理論的カテゴリー形式が存在しなければならない、ということである。カテゴリーは、認識と連帶的に結び付けられている(上記 s.57,58 参照)。形式は、もしもそれが完全化の必要のために、内容的充実を必要とするならば、やはり真に存在するのである。一つの構造要素と共に、他の構造要素が固定され、それによって組織構造全体が固定される。たしかにここではカテゴリー的形式と同様、カテゴリー素材が、その完全な広がりの中で考えられるべきであり、感覚的・直観的領域に制限されるべきではない。他の場合には、哲学的な陳述の現状に関連して、形式-素材-の二重性に基礎を置いた陳述理論を証明することは、たしかに容易なことであろう。感覚的・直観的適用領域を超えて、カテゴリー形式を拡大することは、ここで提出された資述理論に対する必然的な前提や、支柱として、明らかにされる。反対に、次のことが言える。この資述理論を承諾する人は、一哲学的認識の命題が、主語と述語とに従って分節されるのであるから一カテゴリーとカテゴリー素材とへの構造の分割も、哲学的認識領域に対しても認めねばならない、ということである。

それにも関わらず、ここで着手された説明には同時に一定の、何よりもまず、おそらくは疑わしく思われるところの、主語と述語の順列の逆転が結び付けられている。基礎となっているもの、幅広い基礎、カテゴリー的形式の担い手とは、論理的規定の基礎になっているもの、下位にあるもの、そしてそれに支配されているもの、そして同時に、(s.61) この意味での「主題」という意味での基礎である。そして、主語に対して、述語的にふさわしい規定は、規定するものという意味での、また同時に刻印を与えるという意味での付加的なものの、ということである。しかし論理学の歴史に於いては、常に主語と述語の間の関係はこのようにして変わりやすいものであった。普遍性と論理性との間に起こっている問題の組合せが考慮されたとすれば、(註1) 次の如く言うことができる。即ちアリストテレスの実体の、個々の主語の、形而上学的優越は繰り返し何度も、一そして既にアリストテレス自身に於いても一普遍的述語の論理的一形而上学的優越に譲歩しなければならないであろうと。述語の中には、普遍的な、それ故一この問題の錯綜の中で一唯一論理的契機が、即ち理論的組織構造の論理的重心が存在するということ、(註2) このことは始めから、判断の包摂理論を表現している。その理論もまた、主語を *subsumtum* (下位にあるもの、従属しているもの) の意味で、また同時に、下位のものという意味での *subjectum* (下位に置かれたもの、従属するもの) として見做すのである。そしてその理論は、主語と述語に対して、非論理的なものと論理的なものを割り当てる、ということに至るのである。判断は、その理論によれば、最後には非概念的なものを概念的なものへ置き入

れることを意味するのである（註3）。

註1 それについては『哲学の論理学』78f.参照。

註2 トレンデレンブルク：『論理学研究Ⅱ』231/2 も参照。「それにも関わらず、なお、この種の判断に於いては、活動を表現する述語とは、主要な力点が、述語を命題の生き生きとした魂にするような、主要概念である。我々は、述語に於いて考えるのだ。」

註3 わたしが見るかぎり、アベルトの発言は、即ち「プラトンに於いては、感覚世界が主語を、理念が普遍的述語を与え、二つの世界の間の関係は、判断に於いて、その表現を見出す」という発言は、精彩のあるものであるとはいえ、プラトンの著書からは直接に証明できるわけではない。

アベルト：『形而上学』1857,125

既に、フリース：『哲学史』1837,I.370ff.

O. アベルト：『寄稿』207.参照。

ラスクの記述はここで新たな展開を見せている。以前の記述では、包摂関係によって即ち、数学的集合概念によって、主語・述語関係の概念を分析していた。しかしここではアリストテレス以来の個物と普遍の概念対によって、主語・述語の関係を規定しようとしている。しかもアリストテレスの「主語となって述語とならない」個物と、「述語となって主語とならない」普遍とを対比させ、普遍の中にカテゴリー的論理構造を置き入れたのである。ここで問題となってくるのは、認識と判断がもっている主語－述語という陳述の構造とは別に、対象自体がもつ、素材と形式、或いは基体とイデアという対立の構造は、判断作用に於いてどのように結びつくか、ということである。西田は独自の「場所」の理論によってこの難問を切り抜けていったのである。

“Die Lehre von Urteil” (The theory of
judgement) by Emil Lask and the
Philosophy of K. Nishida. (V)

Haruo OHKUMA

College of Arts

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received September 30, 2002)

The description of E.Lask develops here into a new phase. We have seen his description in the first chapter which analyzed the Subject-Predicate-structure by subsumptive relation or set theory (Mengen Lehre = G.). And here he tried to describe the relation of Subject-Predicate by a pair of concepts “Individuum” and “Univerusum”. By comparing “Individuum, which can be subject and can not be predicate”, with “Universum, which can be predicate and cannot be subject”, he introduced into Universum categorial logical structure. Here appears a new problem. that is: We have in our cognition and judgement, a predicate structure of Subject-Predicate, and there is in the Object a opposing structure of material and Idea. How the two structure can be combined together. Nishida had broke through this hard problem by introducing his own theory of “TOPOS”.